

フナとハワイ人

サージ・カヒリ・キング

古代ハワイ人が本当にフナ(Huna)を実践していたのか、という論議がされています。あるハワイ人ではない作家がハワイ人の精神性に関して、フナはマックス・フリーダム・ロング(Max Freedom Long)の造語であると主張しています。フナはハワイの伝統ではないという主張に加えてです。これに関して何が見出せるのか、ハワイやその他の資料を調べてみましょう。

最初に、マックス・ロングがフナという語を造ったという見解について検討しましょう。1989年版ウェブスター・英語百科完全辞典(Webster's Encyclopedic Unabridged Dictionary of the English Language)によると、「coin」という語の8番目の意味に、「単語を造るなどの、造る、発明する、または加工すること」と記されています。

さてロングは、彼の研究基盤をロリン・アンドリュース(Lorrin Andrews)の1865年版ハワイ語辞典(A Dictionary of the Hawaiian Language)に置いていましたが、その辞典の中に、フナという語を次の様な定義で見つけることができます。

隠したり、隠匿すること；他が知ったり見たり出来なくする。

隠匿された知識や知恵などの、隠匿すること（会話や文章では、この定義は kahuna と表現される）。

明らかに、マックス・ロングがこの語を造ったのではありません。『奇跡の裏にある秘密の科学(The Secret Science Behind Miracles)』の23頁で彼は初めてフナという語を、「秘密(Huna)」として用いました。これは隠された知識についての全く妥当な訳です。その後彼は、彼が理解したところのハワイの秘伝(秘密)の知識体系を表わす為に用いるのはこの語であると明言しました。ロングのハワイの秘伝である知識に対する最終的な見解に同意するかどうかは別にしても、彼がこの単語と意味を造り出したのではないという事実は残ります。

しかし、ハワイ人自身が自分たちの秘伝である知識を言い表す為にこの語を用いたのか、という疑問も残ります。口伝の伝統からこれを確定するのは容易ではありませんが、文字が導入された後に数名の博識なハワイ人が彼ら自身の伝統について、いくらか書き残しているの、そこに何かヒントを見出せるかもわかりません。

ハワイ古代のヘイアウ(heiau)と称される神殿では、'anu'u と呼ばれる高い木製の枠組みが用いられていました。それは部分的に樹皮布である kapa に覆われていて、捧げ物の為に、あるいは司祭が神々の言葉を啓示する場として用いられました。啓示の際に彼らは、「秘められた事が明らかになりますように」という言い回しで始めました。メアリー・カウェナ・プクイ(Mary Kawena Pukui)のハワイの諺と詩的表現の本である Olelo No'eau の中には、ハワイ語で同様な言い回しを見つけることができます。プクイ自身の訳では「秘密であった事は最早隠されていません。」です。

サミュエル・カマカウ(Samuel Kamakau)により 1870年 10月 13日に発表された記事、『古の民族(Ka Po'e Kahiko - The People of Old)』の 54頁で彼は、「ハワイの古代では、予言的な語りと秘密のことわざ(olelo huna;秘密の意味合いを持つ語り)は信頼されていた。」と述べています。

マーサ・ベックウィズ(Martha Beckwith)著『ハワイの神話(Hawaiian Mythology)』(ハワイ大学出版、1970年出版)の第六章で彼女は、ハワイ人の情報提供者が語った、大昔ハワイの近くにあり、しばしば交流があった12の聖なる島について、意見を述べています。これらの島には霊的存在が住んでいましたが、人間も往復していたそうです(とてもシャーマン的な発想です)。

13世紀の半ば頃、政治的・宗教的大変動の後、これらの霊の島はほとんど見られなくなったとされています。これらの島は霊的な長の意思次第で、海の中や、水平線、また雲の様に空中に移動出来たとも言われています。これらの霊の島の中で最も有名なものが、カネフナモク(Kanehunamoku)と称され、通常「カネ(kane)の隠れ島」と訳されます。カネはここでの意味はもの造り霊の一種でした。「カネの隠れ島」は、通常MokuhunaoKaneまたは、Kanemokuhunaとさえ訳されます。古代の詠唱に用いられている言い回しである Kanehunamoku をより適切に訳すと、「眼には見えない、もの造り霊の島」でしょう。

プクイとエルバート(Pukui & Elbert)のハワイ語辞典では‘po'o huna’は、「神々のように不思議で、隠されていて、目に見えない」と訳されています。ですからカネフナ(Kanehuna)を、眼に見えないカネ(kane)と訳するのは妥当です。

これら全てが有意義なのは、人間がそこへ旅して、秘伝の知識を学び、戻って他の人間とその知識(例えば、それ以前には人間が知らなかった技術、手工芸)を分かち合ったカネフナモク(Kanehunamoku)に関する多くの物語があるからです。

さらに集中して調べるならば多分、フナが実際にハワイ人によって、カフナ(kahuna)という語に全ての語源や意味合いに関する助けを求めることなく、秘密や秘伝の知識を表わす為に用いられていた実例をもっと探すことが出来るでしょう。意識の力を用いて自然や出来事に影響を与える秘伝の知識である、まさに‘ka 'ike huna’が、ハワイ人によって実践されていたのは、疑いの余地がありません。

それに関する参照事例は、筆記された記録の相当数の中に豊富にあります。しかし私の記事は、フナが古代ハワイ文化の一部であったのを示すのが目的です。私はこの記事をプクイによる本から七つの諺を挙げることで、終えたいと思います。

1. 'A'ohe pau ka 'ike i ka halau ho'okahi ; 全ての知識は一つの流派では教えられない。
知識源は多様で、物事の考え方には多種類あるという捉え方の変形。
2. 'A'ohe pu'u ki'eki'e ke ho'a'o 'ia e pi'i ; どの丘も高すぎて登れないことはない。
全てが可能で、限りというものはない、の別な言い回し。
3. He makau hala 'ole ; どのつり針も魚を釣る。

人は望むものを得るということ。つり針は集中力の主なシンボルで、
良いつり針は餌がなくても魚を引き寄せただろう、ということ。

4. Wela ka hao!;今行え！

5. He 'olina leo ka ke aloha; 歓びとは愛の声である。

6. Aia no ika mea e mele ana; 歌い手に歌を選ばせよ。

力は内から出るという認識の詩的な表現。

7. 'Ike 'ia no ka loea i ke kuahu; 熟練者は建てる聖壇で認められる。

プクイが述べるように、人が何を為すのか、どのようにうまくそれを
為すのかが、熟練者かどうかを示す。

翻訳 M. Hayashi (2005)

Copyright by Aloha International 2001